

がく どう そ かい 学童疎開

たいへいようせんそう
アジア太平洋戦争が激しくなると、都市
こくみんがっこう
の国民学校の子どもたちを地方に疎開
そかい
させる政策がとられました。地方の親戚な
どを頼って疎開(縁故疎開)したり、学校
えんこそかい
ごとにまとまって疎開(集団疎開)したりし
ましたが、何らかの理由で都市に残る子
どももいました。

たなし ほうや
田無町、保谷町は集団疎開を受け入れ
ない地域でしたが、東京高等師範(現筑
とうきょうこうとうしはん
波大学)附属国民学校の児童約210名が、
ふぞくこくみんがっこう
保谷町にあった同校の農園とその近くの
施設(民族学博物館)に一時、集団疎開
をしてきました(この地域に空襲の被害
こうしゅう
が出ると、新潟に再疎開)。

また、縁故疎開で区内からやってきた
子どもたちもいました。

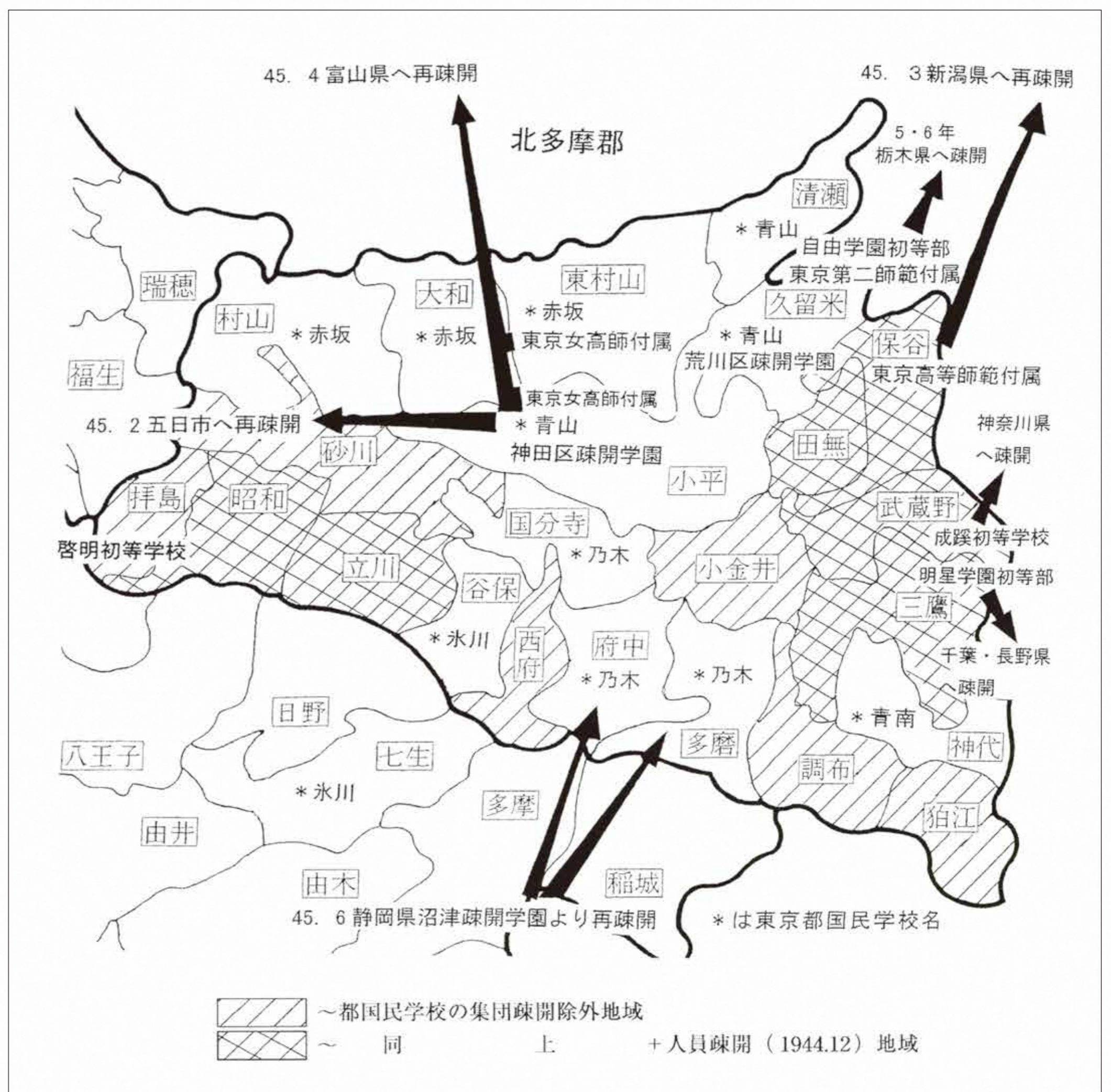


図 北多摩郡・学童集団疎開受け入れと再疎開



民族学博物館
(1939(昭和14)年~62(昭和37)年、内1944(昭和19)年~1946(昭和21)年 休止)
1944(昭和19)年9~12月、本館内の陳列場を区切って、学童疎開教室
に転用されていた。 拵嘉一郎氏所蔵、神奈川大学日本常民文化研究所保管



筑波大学附属小学校保谷田園教場(現在)